

『蝶～パピヨン～』

著：弓月あや

ill：環 レン

案内されるまま、低木に彩られた庭を抜け、ガラス張りの温室へと連れて行かれた。「蝶が逃げ出さないよう、二重扉になっています。それと、このボタンには触れないよう気をつけてください」

ガラスの扉の近くに、赤いボタンが設置されていた。

「これは何ですか？ 警報機？」

「いえ。火災用の排煙設備です。警報が鳴るぐらいならいいのですが、このボタンが押されると、天井がすべて開いてしまいます」

仰ぎ見ると、天井はガラス張りになっている。確かにこれが開いたら、蝶はすべて飛んでいってしまうだろう。

温室の中はテラコッタが敷き詰められ、中央にはちいさな池が造られていた。鬱蒼と見えないよう、ぎりぎりに計算されて植物が置かれているに違いない。どこか廃園のような寂びれた佇(たたず)まいだったが、雰囲気があって、とても洗練されていた。

でも、こんな高級住宅地にいくら相続したからといって、これだけの敷地を持つなんて驚きだ。さっきちらりと見えたあの家屋敷だけでも、普通の人間の給料じゃ考えられない値段だろう。まさに別世界の話だ。

銀座の画廊なんてどれぐらい利益が上がる事業なのかさっぱり分からないけれど、執行さんが普通の人ではないことぐらいは、おぼろげに分かる。

いったい彼は、どんな人なんだろう。

「あ……っ」

そう考えながら温室に足を踏み入れた瞬間、パサパサと音を立てて、まるで風に煽(あお)られた木の葉のように、何かが空中を飛ぶ。

「……蝶……」

青や黒、黄色に白。

美しい色彩を見せつけるようにして、何百という数の蝶が目の前をひらひらと飛び回っていた。

「美しいでしょう。あれが、私の蝶です」

背後から囁かれて振り向くと、執行さんがぼくの後ろに立ちながら、天井を飛ぶ蝶を見ている。ぼくも魅入られたように蝶を見上げた。

「すごい……」

「これらの寿命は儂(はかな)いものです。ですが儂(はかな)いからこそ美しい。そう思いませんか」

これだけの敷地と設備をその儂(はかな)い蝶のために使い、だからこそ美しいと平然と言い放つ執行さんに、何が言えるだろう。ぼくはただ、呆然と蝶を見つめていた。

「權さん」

長身を屈めるようにして、執行さんの唇がぼくの耳元に近づく。それに身を竦(すく)めると、吐息だけで笑われた。

「私の蝶になりませんか」

「……執行さんの、蝶……？」

あまりに幻想的な光景と、非現実的な言葉に返事ができずにいた。

すると、執行さんにそっと耳(じ)殻(かく)にくちづけられ、抱きしめられる。シャツ越しの背中に、彼の体温を感じた。

「執行さ……」

「私が育てたいのは蝶と、そして恋人です」

抗(あらが)うこともできずに身を竦めていると、彼の唇はさらに耳(じ)朶(だ)へ移り、ゆっくりと首筋に落ちていく。びくりと震えた体は、彼が抱きしめていたので、少しも揺らがない。

「美しく、気まぐれで、なのに素直な、そんな人を育ててみたい」

「気まぐれって、いえ、美しいなんてそんな……」

およそ、ぼくのような人間に不釣り合いなことを言われて、かぶりを振った。

「ぼ、ぼくは……そんなんじゃ……」

「私がそうします」

首筋に触れる執行さんの唇は、乾いていて、酷くつめたかった。欲望が感じられないその感触が、なぜだかとても官能的だ。

「あのビストロで出会えたのは、まさに神の恩恵でしょう。きみは雨の音に怯(おび)える、かわいらしい幼虫のようだった」

彼の唇に触れられるだけで、体中が、まるで蕩けてしまうようだ。

「素直で、臆病で、美しい自分を知らずに、ただ外の世界を恐れていた。そんなきみを、私だけの美しい蝶に育てたい」

いつの間にか、ぼくの肩に執行さんの手が置かれている。彼はまるで感触を楽しむかのように、ゆっくりとその手を上下させた。

「權さん。私の蝶になりなさい」

吐息とともに囁かれて、体から力が抜けそうになる。

「……ぼく、は、男なのに、どうして恋人なんですか」

「性別は問いません。私は、ただ、美しいものを求めている。きみは私の理想だ」

「う、美しいって……」

あまりに縁のない言葉に絶句したが、執行さんはむしろ、ぼくが戸惑っていることが不思議そうに首を傾げている。

「きみは美しいよ」

「そんな、あの……っ」

「容姿も、そして性格も美しい。今まで誰にも手(た)折(お)られなかったのが、不思議なぐらいだ。世の人間の目は、節(ふし)穴(あな)揃(そろ)いらしいな」

そう言われたぐらいで自分が美しいなんて思い込めるはずもないが、執行さんは言葉を撤回するつもりはないらしい。

「まだ信じられないようですね。何度でも言いますよ、きみは私の理想です」

胸の鼓動が弾んだ。

未知の領域に足を踏み込むときの躊躇(ためらい)と、そして、ときめきに似ている。

恋人にと言われ本当に驚いたけれど、こんなに強く、こんなにも激しく人に求められることが、あったらどうか。

いや、誰もが平凡だと評価するぼくは、今までこんな求愛をされたことなどない。きっとこれからも、こんなにも激しく愛されることなどないだろう。

「……執行さん」

背後から強く抱きしめられたとたん、その抱(ほう)擁(よう)に崩れ落ちそうになった。

初対面のときにも思ったが、彼は麻薬に似ていると思う。酷く魅力的で、危うい。そして気づいたときにはもう、その魔力の虜(とりこ)になっている。逆らえるはずもない。

ぼくは抱きしめられたまま何も言えなかった。だけど、その沈黙を、執行さんは正確に読み取っていたと、あとになって知らされた。

「私の蝶に、なってくれますね……？」

色香が溢(あふ)れる声に、魂が囚(こ)われるようだ。後ろから伸びてきた指に顎を支えられ、そっと顔を上げられる。

————…このとき、逃げようと思えば、きっと逃げられた。

拘束されていた訳じゃない。脅(おど)されていた訳でもない。

なのに、彼の瞳を見た瞬間、魂を抜かれてしまったような気がする。

ふわりと触れてきた執行さんの唇が、ぼくのそれを塞(ふさ)いだ。軽く甘く、小鳥がついばむようにして触れていた唇は、ゆっくりと貪(むさぼ)るように求めてくる。

息苦しくて、つい逃げようとしたとたんに頭の後ろに手を当てられ、深くくちづけられてしまう。あまりにも深くくちづけに息が止まりそうだ。呼吸をしたくて思わず唇を開くと、熱い舌が入り込む。

「ん、んん、んう……っ」

口(こう)腔(くう)を探るようにして動く舌は、歯列を舐(な)め、ゆっくりと上顎をなぞっていく。

かくん、と膝(ひざ)が砕けたように力を失ったけれど、執行さんの腕は力強くぼくを抱きしめてくれていた。

背筋に何か、言いようのない感覚が走る。そのときは分からなかったけれど、今ならそれが、快感だとはっきりと言えるだろう。その甘やかな悦楽に流されるまま、無意識のうちに執行さんの胸に縋(すが)りつき、口腔を蹂(じゅう)躡(りん)する舌を受け入れていた。ぼくが逆らわないことなど見透かした執行さんの硬い舌が、すぐに絡みついでくる。

本文 p54～60 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>